

品性論 (8)

—— トマス・アクィナスの character 説 ——

諏訪内 敬司

目次

1. はじめに
2. character の語源
3. キリスト教と character
4. トマス・アクィナス『神学大全』における character の意味
5. まとめ
6. 課題

1. はじめに

筆者はこれまで、最高道徳論の基礎用語の一つである「品性」の概念について探究してきた。論文にしたものは以下の通りである。

「品性論 (1) —近代日本における出発と展開—」『モラロジー研究』30号、1990年。

「品性論 (2) —カント教育学と品性①—」『杏林大学外国語学部紀要』10号、1998年。

「品性論 (3) —ヘルバルト教育学と品性—」『モラロジー研究』45号、1999年。

「品性論 (4) —文部省の道徳教育政策と道徳用語—」『杏林大学研究報告 教養部門』16巻、1999年。

「品性論 (5) —カント教育学と品性②—」『杏林大学外国語学部紀要』11号、1999年。

「品性論 (6) —廣池千九郎の品性論①—」『モラロジー研究』49号、2001年。

「品性論 (7) —廣池千九郎の品性論②—」『モラロジー研究』50号、2002年。

その後空白期間があったが、研究しきっていないので、継続して探究することにした。

「品性」という言葉は英語 character (ドイツ語では Charakter) の翻訳語である。古代ギリシア語 *χαρακτήρ* から古代ラテン語 (character) に入り、欧米世界に伝わったものが、明治時代初期に日本で輸入されて翻訳され、広がったのである。それには倫理道徳的

意味と、人間の性格特性という心理学的な意味という2つの流れがある。前者のうち、古代キリスト教神学者のアウグスティヌス (Aurelius Augustinus, A.D.354-430) と中世のキリスト教神学者聖トマス・アクィナス (ST. Thomas Aquinas, 1225?-1274) が「洗礼」という教会での儀式を結びつけて論じている。今回は、トマス・アクィナスの character 説を追究してみた。

2. character の語源

「品性」という用語は明治時代に英語 character に当てられた訳語であり (「品性論 (1)」参照)、その原語は古代ギリシア語 *χαρακτήρ* にまで遡ることができる。それは「元々は絵を描いたり、刻印したりするために用いられた道具と、特にコインの鑄造に用いられたように、特徴ある印と痕跡を意味していた」¹⁾。この語は紀元前5世紀には比喩的な意味を得て、倫理的な心理と文芸批評の両分野で応用されるようになったようである。哲学者アリストテレスの弟子であり後継者であるテオプラストス (Theophrastus, B.C.372-288?) はこの語をタイトルにした書物 (ΘΕΟΦΡΑΣΤΟΥ ΧΑΡΑΚΤΗΡΕΣ) 『人さまざま』を出版している²⁾。テオプラストスはこの書物で、空とぼけ (*εἰρωνείας*)、へつらい (*κολακείας*)、無駄口 (*ἄδολεσχίας*)、粗野 (*ἀγροικίας*)、お愛想 (*ἀρεσκείας*)、無頼 (*ἀπονοίας*) など、人間の悪い性格面を30項目にわたって描写している。今日、character が心理学では単に「性格」という意味で使われる起源がここに見られる³⁾。

テオプラストスに代表されるような性格面の描写は、古代ギリシアヘレニズム期の新喜劇派の作家によって明瞭に、また強力に大衆の前に提示された。一方、修辞学者も同じように、性格について *χαρακτήρ* を使って言及したようである。このように、心理的言葉としては、「*χαρακτήρ* という用語はその後の著作の中にしばしば、また多様な意味や色合いをもって使われた」⁴⁾。さらにこの言葉は、文字のスタイルの種類、または類型 (範疇) の意味にも使われるようになった。古代ローマの作者にとって、*χαρακτήρ* は外国語であり、そのため彼らは自分達の言語に同等のものを見つけようとした。

χαρακτήρ はやがてキリスト教世界に受け継がれ (ラテン語表記は character)、さらに近世の哲学者 I. カント (独、1724-1804) (ドイツ語表記は Charakter)、同 F. ヘルバルト (独、1776-1841) などを経て社会改革家 R. オウエン (英、1771-1858)、聖職者・思想家 R. エマーソン (米、1803-82)、牧師でブラウン大学学長 F. ウェーランド (米、1796-1865)、倫理道徳啓蒙家・伝記作家 S. スマイルズ (英、1803-82) などにつながっていったと思われる。これらの用法は主に倫理道徳的意味が込められて使われていた。しかしこの間他方で、近代の心理学の発展により、character は再び性格特性の意味で使われる流れも出てきた。

こうした2つの潮流のなかで「品性」を研究するには、キリスト教の存在は無視し得ない。欧米の思想・言語はキリスト教に大きく影響されているからである。そこで、キリス

ト教における *χαρακτήρ* を調べなければならない。キリスト教のなかで、教父アウグスティヌスが *character* に若干言及しているが、アウグスティヌスの説を発展させたのは、キリスト教神学を大きく前進させた中世のトマス・アクィナスである。そこで、アクィナスにみられる *character* の使い方や意味を調べてみた。アクィナスは『神学大全』(*Summa Theologiae*) の中で *character* を扱って多少論じている。

3. キリスト教と *character*

新約聖書がギリシア語によって書かれる際、ギリシア人がなぜ *χαρακτήρ* という語を使ったのかは不明であるが、聖書のギリシア語版をラテン語版に訳すとき、ローマ人にとって *χαρακτήρ* は外国語であったため、母国語に同等の意味を持つ言葉を探そうとする。しかし、結局適当な語が見付からず、そのままこの語がラテン語表記して使われたようである。

ギリシア語版聖書で *χαρακτήρ* は、①^{けもの}獣の刻印、しるし(新約「ヨハネの黙示録」13-17、14-11、16-2、19-20、20-4)、②神の本質の真の姿(本性の型)(新約「ヘブル人への手紙」1-3)の意味で使われている⁵⁾。

キリスト教神学が発達する過程、とくにアウグスティヌスとトマス・アクィナスはこの語の②の意味を発展させ、キリスト教にとって重要な意味をもつ秘跡(sacramentum)と呼ばれる教会儀式において、魂の上に神から一定のものを受けた永久に消えない徴し(signum)を刻印する言葉として使うようになる⁶⁾。

A. M. ロゲは、秘跡は正しく行われれば、受領者の魂の状態のいかにかわらず自動的にめぐみを生ずるのではないと否定し、「秘跡の定式(sacramentum tantum)が必然的に生ずるのは、……洗礼、堅信、叙階の三つにおけるカラクテルと、ほかの四つの秘跡における準カラクテル的なものだけである」⁷⁾と、カラクテル⁸⁾に2つの質があることを示唆している。

アウグスティヌスの洗礼の定義を説明する O. W. ハイックは、「洗礼は、非改宗者に救いをもたらすことはないが、その客観的な性格は、主が彼らにご自身の所有であることを主張する『支配のしるし』(*character dominicus*)を刻印されるとの主張で保持されている⁹⁾と述べている¹⁰⁾。

ロエブ古典文庫のアウグスティヌス(239)によれば、Donates 派の国司教への手紙(No. 39)では、“*characterem dominicus*”が“*mark of the Lord*”(神の印)と訳されている。その注によれば、アウグスティヌスは *character* を次のように定義しているという(Serm. 302. 5-3)“*characterem accipit Christianus, cum fit catechumenus.*”[カラクテルは洗礼志願者が許されたとき、キリスト教徒に授けられる]¹¹⁾。

秘跡(sacramentum)において授けられるカラクテルは *character sacramentalis* と表現されている。 sacramentum (sacramentum)は元々、軍隊で兵士が軍に対して服従することを誓うことを意味していた。それがキリスト教の用語として用いられるようになった

ようである。キリスト教において、信仰者がキリストに服従することを求めたからであろうか。character は教会儀式に使われることによって、神秘的な意味をも持つようになり、character sacramentalis は「司教が祈りつつ手を受洗者の頭上に置いて堅信の秘跡を授け」、その結果、受洗者に霊的カラクテール (character spiritualis) が与えられると考えられている¹²⁾。

それをアウグスティヌスは「見えざる恩恵の見えるしるし」¹³⁾と表現している。何にしるしが付けられるのか。人間の目には見えない人間の靈魂の上に、と考えられている。しかもそれは、1回付けられると、仮に罪や背信行為を犯しても生涯消えないとされ、character indelibilis (消えざるしるし) と言われる。従って、character は一度受ければ繰り返して受ける必要はなく、また二度と受けられないものとされている。

このように、character はキリスト教の独自哲学を形成した教父時代 (2世紀-8世紀) に教会儀式と結び付き、神から直接与えられしるしということになったように思われる。こうして character は、テオプラストスの単に人間の性格特性を表すことから、アウグスティヌスによって神と結び付けられ、それがトマス・アクィナスにも受け継がれることになったと思われる。

4. トマス・アクィナス『神学大全』における character の意味

トマスはアウグスティヌスの考えをより詳しく論じて、character を秘跡の中の儀式である洗礼、堅信礼、叙階式によって信仰者が聖霊を通して神から受ける一定の精神的な封印 (signum) であると明瞭に位置付けた。彼において、character が神と直接関係のある精神的なものであることが定着したと考えられる。

『神学大全』は未完のまま残された大著であり、もともと神学初心者のための教科書を意図して書かれた。論述の方法は中世大学における討論を理想的な形に凝縮したもので、構成単位の項でまず主題に関して疑問が提起され、著者の立場と対立的な異論が導入される。次にそれらの異論とは反対の典拠や議論が紹介され、さらにそれらの対立をより高い立場から総合するものとして著者の解答が提示されている。そして最後に、著者自身の立場から異論の一つ一つに対して応答がなされて項が閉じられる¹⁴⁾。従って、著者の主張がどれかを読み誤らないように注意して見て行かなければならない。

トマスは『神学大全』第3部第62~65問題¹⁵⁾、第66、68、69、70、72問題 (秘跡を論じる部分)¹⁶⁾に於いて character に言及している。中でも特に第63問題は「秘跡の他の結果、すなわち霊印* (character) について」と題されて集中的に論じている。これからも分かるように、character はキリスト教にとって大切な事項である「秘跡」に関係するものとして扱われている。しかし、同書全体の分量からするとわずかな頁しか割いていない。それは、character がキリスト教のなかで、中心用語ではないことの現れであろうか。

* 霊印について、翻訳書では注が複数ある。参考のために、それらを抜き出しておこう。

訳書第 41 冊

注 179 ギリシア語 *χαρακτήρ* (刻印、特徴) に由来。(158 頁)

注 121 「かつては『(秘跡*)の 記号』あるいは『(秘跡の与える) 資格』と訳されたこともあるが、ここでは最近の慣例に従ってこの訳語 (霊印) を用いる」(下線は引用者)。(153 頁)

訳書第 42 冊

注 23 霊印は靈魂に刻みつけられた一種の証印であり、徴しであるが、単なる徴ではなく何らかの霊的な能力を含蓄しており、その意味で秘跡的徴しである。(222 頁)

注 332 霊印は恩寵そのものではなく、……恩寵へと秩序づける一種の能力 *potentia* なのである。(242 頁)

注 536 霊印は「神的礼拝へと秩序づけられた、何らかの霊的な能力 *spiritualis potestas*」(S.T., III 63, 2) であり、そのようなものとして何らかの働きを為す根源である。(255 頁)

注 666 霊印はすべてキリスト教の祭司職への参与の徴しであり、この参与を有効に実行するための霊的能力であるが (第 63 問題第 3 項)、堅信**の霊印は洗礼***の霊印と叙階****の霊印の中間に位置づけられるべき霊的能力・権能を授けるものと言えよう。(263 頁)

〈参考〉¹⁷⁾

* 秘跡 (*sacramentum*) は、秘義を意味するギリシア語の *μυστήριον* のラテン語訳で、人を聖化するための儀式的印を意味する。キリスト教信者となるために定められた儀式のことである。教派によってその意義や名称、教えは異なる。元々、軍隊における誓約すなわち、兵士が軍に服従を誓うことを意味した。キリスト教では、内的な見えない霊的恩恵を、外的な見える形において表すしるしと考えられ、キリストによって定められた恩恵の手段、恩恵を受ける方法とせられた。洗礼、堅信、聖体 (聖餐)、告解、塗油、叙階、婚姻が第 2 公会議 (1274 年) において秘跡と宣言された。

** 堅信 (*confirmatio*) は、洗礼の最後に、按手と聖香油の塗油によって聖霊を身に帯びる秘跡であり、洗礼を受けた者が信仰を堅く持って立つことである。監督が志願者の上に手を差し伸べて祈り、額に油を注ぎ、さらに額に十字架のしるしをつける。洗礼を補足して完全にするものと考えられている。今日では、洗礼は幼児期に、堅信は後年にという慣行ができている。

*** 洗礼 (*baptismus*) は、キリスト教徒になるために、教会が執行する秘跡である。〈浸す〉という意味のギリシア語 *βάπτισμα* の名詞形を新訳聖書において術語として用いたことに由来する。旧約にも水による清めは見られるが、ヨハネは来るべき救世主であるイエスに対して行った。このときイエスは「これはわたしの愛する子」(マコ 1 の福音書: 11) という声を聞き、メシアとしての召命を受け、その使命を十字架の死と復活によって成就したとされる。イエスは自ら洗礼を施さなかったが (ヨハネの福音書 4: 2)、復活後弟子たちに向かって、洗礼を施すことを命じた (マタイの福音書 28: 19)。ここに、教会が洗礼を行う根拠がある。洗礼を受ける者は聖霊の力によって〈キリストとともに死に〉キリストとともに〈新しい命に生きる〉ことに参与し、〈キリスト者の共同体に加入する〉ことを表明する。その前提条

件は、悔い改めてイエスを信じるよう求められ、これに答えて生きるという決意を公に告白する。方法は、初代教会より12世紀頃までは全身を水に3回浸していたが、その後頭部への注水や撒水も用いられるようになった。受けた人は原罪と、それまでに犯したすべての自罪が赦され、賜物として聖霊を受けるとされ、イエスの弟子団に加えられる。最初は〈イエス・キリストの名によって〉行われたが、次第に「父・子・聖霊の三位一体の名」によって行われるようになった。原始教会時代から洗礼が行われ、今日でも教会の秘跡のなかで最も根本的なものとされる。

**** 叙階 (ordinatio, ordo) は七つの秘跡の一つであり、聖職者として指名任命される者が司教の按手を受けヨハネの「聖霊を受けなさい」に始まる言葉が宣言されて執行される儀式である。

次に、トマスが霊印 (character) について論じている主な部分の内容を紹介しておく¹⁸⁾。

(1) 「第62問題 秘跡の主要な結果、すなわち恩寵* (gratia) について」において、秘跡の主要な結果を考察している¹⁹⁾。

* 恩寵は、イエス・キリストの生涯、特に死と復活を通して示された神の愛を言い表す言葉である。この恩寵は信仰によってわれわれ人間のものとされるが、信仰はわれわれの意志の能力ではなく、神の賜ものとされている。信仰によってあずかる神の恩寵は、罪のゆるしの恩寵であり、和解の恩寵であり、さらに新生の恩寵である、という。

(2) 「第63問題 秘跡の他の結果、すなわち霊印 (character) について」では、諸々の秘跡の他の(二次的)結果、すなわち霊印 (character) について考察している。そこでは、次の六つが問題点とされている。

- ① 諸々の秘跡からして靈魂 (anima) のうちに何らかの霊印が生ぜしめられるか
- ② この霊印とは何であるか
- ③ 誰の霊印であるか
- ④ 何のうちに基体* (subjectum) のうちに在るような仕方であるか
- ⑤ 消すことのできない仕方で内属するか
- ⑥ すべての秘跡が霊印を刻みつける (imprimant) か²⁰⁾

* 基体とは、古代ギリシアの哲学者アリストテレスの用語 *ὑποκείμενον* (下に置かれたもの) のラテン語訳であり、さまざまな属性の担い手の意味である。

「第一項 秘跡は靈魂のうちに何らかの霊印を刻みつけるか」では、以下のことが論じられている。

・新法の秘跡は2つのことに秩序づけられている。すなわち、①罪に対抗する救済を提供

することと、②キリスト信者の生活の祭儀 (ritus) にもとづく、神の礼拝に関わる事柄において靈魂を完成すること。

・明確な仕事を委ねられた者はそのことを示す徴しを与えられるのがならわしであった。例えば、軍務に徴集された兵士は、何らかの身体的な仕事を委託されたことの徴しとして、或る身体的な刻印を受ける。

そのことから、人々は秘跡によって神の礼拝に関わる何らかの靈的な事柄を委託されるので、その結果として信徒たちは秘跡によって或る靈印を刻みつけられることになった。○キリストを信じる人々は、神的予定調和の証印によって将来の栄光という報いを受けるように定められている。彼らは自分たちに刻みつけられている何らかの靈的な証印 (spirituali signaculum) によって現在の教会に適合した行為を為すように委託されており、この靈的な証印が「靈印」 (character) である。

○靈魂に刻みつけられた靈印は、可感的秘跡によって刻みつけられるかぎりにおいて徴しとしての本質側面を持っている。にもかかわらず、キリストが「父なる神の本質の完全な現れ figura」もしくは「靈印 character」であると言われるごとく、すべて何らかのものとの現れとなり、あるいは他のものから区別するところのものは、それが可感的ではなくても、何らかの類似・比喩 (similitudo) によって靈印もしくは証印と呼ぶことが可能である²¹⁾。

「第二項 靈印は靈的な能力であるか」では、以下のことが論じられている。

・新法の秘跡は、それらによってわれわれがキリスト信者の敬神の祭儀にしたがって神を礼拝するように定められているかぎりにおいて、靈印を刻みつける。

・靈印は神的礼拝に属する事柄へと秩序づけられた、何らかの靈的な能力を含意する

・しかし、さきに諸々の秘跡のうちにあるちから virtus について言われたごとく (第62問題第四項 道具が主要的能動原因に関係づけられるような仕方、このちからは或る実在の固有的で完全なちからに関係づけられる。というのも、道具は主要的能動原因によって動かされる限りにおいてのみ働きを為すからである)、この靈的な能力は道具的であることを知らなくてはならない。

・秘跡の靈印を有することは神に奉仕する者に適合することであり、奉仕者は道具という在り方をする者なのである。

・したがって、靈印も本来的な意味では類または種のうちに在るのではなく、むしろ質の第二の種へと還元される。

○靈印はそれを刻みつける (imprimunt) ところの可感的な秘跡との関係において、徴しという本質側面を有する。しかし、それ自体として考察された場合には、根源という本質側面を有する。

○靈印は可感的な光ではない。

○徴しという名称において含意されている関係は、何らかのものに基礎をおいているのではなくてはならない。しかし、靈印というこの徴しとの関係は、直接的に靈魂の本質を基礎と

することはできない。その場合にはすべての靈魂に自然本性的に適合することになるうからである。したがって、それを基礎としてこうした関係が成立するような何ものかが靈魂のうちに措定されなくてはならない。このものこそ靈印の本質である²²⁾。

「第三項 秘跡的靈印 (character sacramentalis) はキリストの靈印 (character Christi) であるか」では、以下のことが論じられている。

・靈印は、それによって或るものが目的へと秩序づけられるべきものとして徴しづけられるところの、何らかの証印 (signaculum) である。

・信仰者の各々が神の礼拝に関わる事柄を受け取り、あるいは他者に伝えることへと秩序づけられ、ふりあてられている。秘跡的靈印は本来的にこのことへとふりあてられている。

・キリスト信者の敬神の祭儀の全体がキリストの祭司職から派生している。したがって、秘跡的靈印が特別にキリストの靈印であることはあきらかである。キリストの祭司職 (sacerdos) に信者たちは秘跡的靈印にもとづいて似たものたらしめられる。この靈印はキリスト御自身から派生するところの、キリストの祭司職への何らかの参与にほかならない。

○秘跡的靈印は外的な秘跡との関係では実在 res であり、究極的な結果との関係では秘跡である。

○或るものは二つの仕方で靈印に帰属させられることができる。第一は秘跡という本質側面にもとづいて。この仕方においては、それは秘跡において授けられる不可視なる恩寵の徴しである。第二は、靈印という本質側面にもとづいてである。この仕方において、それは或る主要的なる者に似た形へとかたちづくる徴し signum configurativum である。

○キリスト信者の礼拝へとふりあてられている者は、それによってキリストに似た形へとかたちづくられる靈印を受ける。ここから、それは本来的にキリストの靈印である。

○信仰者の靈印は、それによってキリストを信じる者が悪魔に仕える者から、永遠の生命への関係において区別されるものである。その前者は、愛徳 (caritas) と恩寵 (gratia) を通じて為される。後者は秘跡的靈印を通じて為される²³⁾。

「第四項 靈印は靈魂の諸能力のうちに基体 (subjectum) のうちに在るような仕方で在るか」では、以下のように論じられている。

・靈印は神の礼拝に属する事柄を受け取り、あるいは他者に伝える、ということのために靈魂に徴しづけられるところの何らかの証印である。

・靈印は基体のうちに在るような仕方で靈魂の本質のうちに在るのではなく、その能力のうちに在る。

○恵み深い神は靈印を受けている人々に恩寵を授け、それによって彼らが自分たちに委託されていることをふさわしい仕方で成就できるようにしてくださるのである。したがって、靈印にたいしては神の礼拝に属する諸々の行為という根拠にもとづいて基体が帰属せ

しめられるべきであって、恩寵という根拠にもとづいてではない。

○靈魂の本質は、本質の諸根源から出てくる自然本性的能力の基体である。靈印はこうした能力ではなく、外的な根源 extrinsecum から来る何らかの靈的な能力である。ここから、靈魂の自然本性的な能力は、靈印がそれであるところの靈的に生きるところの恩寵によって完成されるごとく、そのように靈魂の自然本性的な能力は、靈印がそれであるところの靈的な能力によって完成される。なぜなら、習慣 (habitas) と性状 (dispositio) は、それらが行為へと秩序づけられているということのゆえに、靈魂の能力に属するものだから。

○靈印は神の礼拝 (cultus) に属する事柄へと秩序づけられている。神の礼拝は外的な徴しによる信仰の何らかの明言である。ゆえに、靈印は靈魂の認識能力のうちに在るのだからなければならない²⁴⁾。

「第五項 靈印は消すことのできない仕方 (indelebiter) 靈魂のうちに在るか」では、以下のように論じられている。

・秘跡的靈印はキリストの祭司職への、彼を信じる人々における何らかの参与である。それは、キリストを信じる人々が、諸々の秘跡および神の礼拝に属する事柄に関して何らかの靈的能力を分有することで、彼に似た姿に形づくられているかぎりにおいて。また、このことのゆえに、キリストは靈印を有することは適合しないのであって、彼の祭司職の権能は靈印にたいして、十全にして完全なものがそれらの何らかの分有にたいするように関係づけられる。ところが『詩編』第百九によると、キリストの祭司職は永遠である。そこから、キリストの祭司職によって為されたすべての聖化は、聖別されたものが存続するかぎり、永遠的である。このことはいのちのない事物の場合にもあきらかである。教会あるいは祭壇の聖別* (consecratio) はそれらが破壊されないかぎり、常に永続する。ゆえに、靈魂が靈印の基体であるのは、信仰がそこに見出されるところの知性的部分に即してなのであるから、次のことは明白である。知性が恒久的であって不可滅であるごとく、靈印は消すことのできない仕方で靈魂のうちに存続する。

○靈印が消すことのできない仕方で靈魂のうちに在るのは自らの完全性のゆえにではなく、そこから靈印が何らかの道具的なちからとして派生しているところの、キリストの祭司職の完全性のゆえにである。

○どのように意志が反対方向へと動かされても、靈印は主要的な動因の不可変性のゆえに取り除かれることはない。

○現在の生の後では外的礼拝は残存しないとはいえ、その礼拝の目的は存続する。ゆえに、現在の生の後において靈印は存続する。善き者においては彼らの栄光を、そして悪しき者においては彼らの恥辱をもたらす。ここで、死後も靈魂は存続することが前提されている²⁵⁾。

* 聖別は、人や物が一般的世俗的使用から移され、神との特定の関係へと分離されることで

ある。

「第六項 新法のすべての秘跡によって霊印が刻印されるか (imprimatur)」では、以下のように論じられている。

・諸々の秘跡における能動者にかかわるのが叙階の秘跡 *sacramentum ordinis* である。この秘跡によって人々は秘跡を他者に伝えることへとふりあてられるからである。他方、受け取る者にかかわるのは、それによって人が教会の他の諸々の秘跡を受け取るための権能を受け取るころの、洗礼の秘跡である。或る仕方で堅信 *confirmatio* も同じことへ秩序づけられている。ゆえにこれら三つの秘跡、洗礼、堅信、叙階によって霊印は刻印される。

○人はすべての秘跡によってキリストの祭司職 (*sacerdotii Christi*) に参与する者たらしめられるが、それはキリストの祭司職の何らかの結果を受け取るという意味においてである。しかし、すべての秘跡によって或る人がキリストの祭司職による (神の) 礼拝にかかわる何らかのことを為したり、受け取ったりすることへとふりあてられるのではない。このことが、秘跡が霊印を刻印するために必要とされることなのである。

○すべての秘跡によって人は聖化されるのであるが、それは聖性が罪からの潔めを含意することによるものであり、この潔めは恩寵によって為される。しかし、霊印を刻印するころの若干の秘跡によって人は特別に、何らかの聖別、つまり神の礼拝へとふりあてられるという仕方で聖化される²⁶⁾。

(3) 「第 64 問題 秘跡 (*sacramentorum*) の原因 (*causis*) について」「第一項 神 (*Deus*) のみが秘跡の結果を生じるために内的に働き給うか、それとも執行・奉仕者も働きを為すか」では、次のように論じられている。

・秘跡の内的結果である恩寵は……神のみからのものである。さらに若干の秘跡の内的結果である霊印も、神である主要的能動原因から発出するころの道具的ちから (*virtus instrumentalis*) である。

○秘跡の結果であるところのものは、教会もしくは奉仕者の祈りによってかちとられるものではなく、そのちからが秘跡において働いているところのキリストの受難の功德によるものである。ここからして、秘跡の結果は奉仕者がよりよい者であればよりよいものとなるのではない。しかし、何かそれ (秘跡の結果) と結びつきのあるものが、秘跡を受ける者にたいして奉仕者の信心によってもたらされることはありうる。とはいえ、このことも奉仕者 (自身) の働きによるものではなく、神が働きを為してくださるよう願って与えられたものである²⁷⁾。

「第八項 執行・奉仕者の意向は秘跡の完成のために必要とされるか」では、以下のように論じられている。

○霊印に関しては (秘跡に) 近づく者の信心によって奉仕者における欠陥が補われるとは

思われぬ。なぜなら、霊印は秘跡によるほかはけっして刻印されることはないからである²⁸⁾。

(4)「第 66 問題 洗礼の秘跡について」「第九項 洗礼は繰返すことが可能か」では、次のように論じられている。

・洗礼を再び授けることは不可能である。第一の理由は、洗礼は或る人が古い生命に死に、新しい生命を生き始めるとの意味で、一種の霊的な再生 spiritualis regeneratio である、ということである。しかるに、一人の人間は一度しか生まれることはできない。したがって、肉による生まれが繰返されないように、洗礼は繰返されることは不可能である。

・第二の理由は、われわれはキリストの死によって罪に死に、生命の新しさにおいて復活する、という仕方です。「キリストの死において洗礼を授けられた」(『ローマ人への書翰』第六章第三節)ということである。しかるに、キリストは「ただ一度だけ死に給うた」(同第六章第十節)。したがって、洗礼も繰返されてはならない。

・第三の理由は、洗礼は消すことができず、一種の聖別 (consecratio) をもって与えられるところの霊印を印刻する、ということである。ここからして、洗礼も繰返されない。

・第四の理由は、洗礼は主要的に原罪 (originale peccatum) にたいする癒しとして与えられる。したがって、原罪が繰返されることがないように、洗礼も繰返されないのである²⁹⁾。

(5)「第 68 問題 洗礼を受ける者について」「第八項 受洗者の側において信仰 (fides) が必要とされるか」では、次のように論じられている。

・洗礼によって二つのもの、すなわち霊印と恩寵 (gratia) が靈魂のうちに生ぜしめられる。それゆえ、或ることが洗礼にとって必要不可欠なこととして要求されるのは二つの仕方においてである。①それなしには秘跡の究極的結果である恩寵を持つことができない、という意味においてであり、この意味で直しい信仰 (recta fides) は洗礼にとって必要不可欠なものとして要求される。②それなしには洗礼の霊印が刻印されることができないものとして、或るものが洗礼にとって必要不可欠なものとする。この意味では洗礼者が直しい信仰を有することは洗礼を授ける者の直しい信仰と同じく、洗礼 (の秘跡) にとって必要不可欠なことではない。—秘跡にとって必要不可欠な他のものが欠けていないかぎり。というも、秘跡が完成されるのは、洗礼を授ける者の正しい生き方 (justitia) によってではなく、神のちから (virtutem Dei) によってであるから³⁰⁾。

(6)「第 69 問題 洗礼の結果について」「第一項 洗礼によってすべての罪が取り除かれるか」では、次のように論じられている。

・洗礼によって罪の古い生き方に死に、恩寵の新しい生き方において生き始めることはあきらかである。しかるに、すべての罪は以前の古い生き方に属する。したがって、すべての罪が洗礼によって取り除かれるという帰結が生ずる³¹⁾。

(7)「第72問題 堅信 (confirmatio) の秘跡について」「第五項 堅信の秘跡は霊印を刻印するか (imprimat)」では、次のように論じられている。

○霊印は或る聖なる行為へと秩序づけられた何らかの霊的な権能である。さきに、洗礼がキリスト信者の生命へと何らかの霊的に誕生することであるように、堅信は人を霊的な完全年齢へと進ませる何らかの霊的な増強である、と述べた(第一項、第65問題第一項)……堅信の秘跡において霊印が刻印されることは明白である。

○すべて秘跡は何らかの信仰宣言である。したがって、受堅者はいわば「職務上」キリストにたいする信仰を言葉でもって公けに宣言する権能を受けとるのである。

○割礼においてたんに身体において記号 (character) が刻印されるのみであって、靈魂においては何も為されない。しかし、堅信においては、それが新法の秘跡であることのゆえに、身体的な記号と共に、霊的な霊印 (character spiritualis) も同時に刻印されるのである³²⁾。

「第六項 堅信の霊印は洗礼の霊印を必要不可欠なものとして前提するか」では、次のように論じられている。

○堅信の霊印は次に述べるような仕方で必要不可欠なものとして前提するのであって、洗礼を受けていない者が堅信を授けられても何も受けとらないのであって、洗礼を受けた後に再び堅信を授けられなければならない。その理由は、堅信は洗礼にたいして、増強(成熟)が誕生にたいするような関係にある、ということである。いかなる人もまず先に洗礼を受けているのでなかったら、堅信の秘跡を授けられることはできない³³⁾。

5. まとめ

トマスが character 霊印について述べている主な内容をまとめてみよう。

- ・洗礼、堅信、叙階の三つの秘跡を受けることにより、キリスト教を信仰することを宣言し、教会に適合した行為をするように神から委託されて、人間の肉眼には見えない霊的な徴し (signum) を靈魂に刻み込まれる。それが character 霊印である。
- ・従って、character 霊印は洗礼を受けたすべてのキリスト教徒に与えられるのではなく、さらに叙階を受けた者のみが与えられると考えられる。
- ・霊的な事柄を神から委託されるので、その結果として靈魂に徴しを刻みつけられる。
- ・霊印を刻印される人は、他の人に比べて特別に神への礼拝へとふりあてられるという仕方で聖化される。
- ・霊印は靈魂の内側に与えられる。
- ・霊印は靈魂の本質からではなく、外的根源から来る霊的能力である。
- ・霊印を与えられたということは、神に奉仕する者にふさわしい。
- ・キリストの完全性のゆえに character 霊印は消え去ることはないので、洗礼は二度受けることはできない。

・現在の生の後（死後）も character 霊印はその靈魂に存続する。

以上のように、character はアウグスティヌスを経てトマスによって、キリスト教の秘跡という教会儀式において、司祭を通して信仰に入ったことの宣言をいわば神から認められたことを印して、靈魂の上に刻み付けられた或る種の印と位置付けられた。character はキリスト教と結び付くことによって、宗教性ととも、神は善性であるというキリスト教の神観念によって、character も善性を帯びる可能性を秘めている。

中世以来、キリスト教では、character は秘跡と一体として考えられてきたが、やがてルネッサンスを経て宗教改革が起こり、プロテスタント側はカソリックとは多少異なった見方をするようになる。しかし、基本的には、キリスト教全体として、character の意味は大差ないと見て差し支えないであろう。

むしろ、ヨーロッパではルネッサンスを経て、キリスト教中心の見方から離れる兆しが見えはじめ、character は秘跡と一体という解釈から離れて行く。そして、ラ・ブリュイエールを経て心理学的な性格特性という意味と、カントによって、人間の道徳に結び付けた character 観が出てくることになった。

6. 課題

χαρακτήρ は聖書では、霊印としての意味では使われていない用語である。トマス・アクィナスは character に霊印としての意味を込めた。順序が逆になるが、アウグスティヌスにおける character の意味及び、キリスト教のなかでその意味がどう変遷したのか、今日のキリスト教界での意味と、キリスト教での意味が、オウエン、スマイルズらにどう影響を与えたか、その意味の違いは何か、などの探究が課題である。

注

- 1) James Hastings ed., *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, vol. 3, T. & T. Clark, 1910 (1967), pp. 364-5.
- 2) *The Characters of Theophrastus*, The Loeb Classical Library 225, Harvard University Press, 1929. テオプラストス著、森進一訳『人さまざま』岩波文庫、1982年。
- 3) この書物を元に、フランスのラ・ブリュイエール (La Bruyère) が17世紀に翻訳付録のような形で *Les caracteres de Theophraste*, 1687『人さまざま—またの名当世風俗誌—』を出版し、character が再び性格や人物描写として使われる契機となり、フランスだけではなく、他の国でも大きな影響を与えた。それが流行した結果として、性格の個々のタイプの分析と描写が、古典後期と同様に再度文学の関心の主題となった。その当時 character という用語は、肖像、素描、描画に似たものにしばしば応用された。しかしそれは主に、個人の固有な肉体的体格——人格 (パーソナリティー) の変わりやすい質とは対照的に、より固定的な質——を暗示するために用いられた。したがって、character は多様な内容を表すことになった。
- 4) James Hastings, *op. cit.*, p. 364.
- 5) 参照した下文献を挙げておく。Greek-English Lexicon of the New Testament, Translated, Revised and Enlarged by Joseph Henry Thayerd, fifteenth printing, 1997, Zondervan Publishing House. p. 665. 玉川直重著、田中忠信監修『改訂新版 新訳聖書ギリシア語辞典』キリスト教新聞社、2000年、968頁。荒井献・H. J. マルクス監修『ギリシア語新訳聖書釈義事典 I』教文館、1993年、152頁、『同

- Ⅲ』1995年、505-506頁。『聖書語句大辞典』教文館、1959年、511頁、702頁。高橋虎/B. シュナイダー監修『新共同訳新訳聖書注解 Ⅱ』日本基督教団出版局、1991年、346頁。
- 6) カソリックでは秘跡は中世から7つの儀式——洗礼、堅信、聖体、告解、塗油、叙階、婚姻——から成るとされるが、プロテスタントは聖餐、洗礼のみを秘跡と認めている。
- 7) A. M. Roguet O. P., *Les Sacraments signes de vie*, 1952. A. M. ロゲ『秘跡とは何か』岩村清太訳、ドン・ボスコ社、1963年、15-16頁。
- 8) character の日本語への翻訳はキリスト教用語としては「品性」という表現では定着していないようである。
- 9) O. W. ハイック、賀来周一訳『キリスト教思想史』聖文舎、1969年、277頁。
- 10) 洗礼は古代ユダヤ教時代から行なわれている。
- 11) The Loeb Classical Library 239, Augustinus, *Selected Letters*, Harvard University Press, 1930, p. 288.
- 12) アンブロシウス『秘跡』熊谷賢二訳、創文社、1963年、12、100、101頁。
- 13) 『キリスト教大事典』教文館、1963年、443頁。
- 14) 稲垣良典『トマス・アクィナス』勁草書房、1979年、20頁。
- 15) ST. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, L VI . L VII ., Blackfriars, 1975. トマス・アクィナス著、稲垣良典訳『神学大全 第三部 秘跡論—総論 (第六十一-六十五問題)』第41冊、創文社、2002年。
- 16) トマス・アクィナス著、稲垣良美訳『神学大全 第三部 秘跡論—洗礼と堅信の秘跡 (第六十六-七十二問題)』第42冊、創文社、2003年。
- 17) 『新カソリック大事典 I-IV』研究社、1998-2000年、および『キリスト教大事典』教文館、1964年、などを参照した。
- 18) () 内のラテン語は、ST THOMAS AQUINAS, *SUMMA THEOLOGÆ*, VOLUME 56, 57, Latin text. English translation, Introduction, Notes & Glossary, BLACKFRIARS 1975より引用した。
- 19) 『神学大全』41冊、44頁。
- 20) 『神学大全』41冊、67頁。
- 21) 『神学大全』41冊、68-70頁。
- 22) 『神学大全』41冊、71-74頁。
- 23) 『神学大全』41冊、75-78頁。
- 24) 『神学大全』41冊、79-81頁。
- 25) 『神学大全』41冊、82-85頁。
- 26) 『神学大全』41冊、85-88頁。
- 27) 『神学大全』41冊、89-92頁。
- 28) 『神学大全』41冊、113-116頁。
- 29) 『神学大全』42冊、36-40頁。
- 30) 『神学大全』42冊、36-40頁。
- 31) 『神学大全』42冊、120-122頁。
- 32) 『神学大全』42冊、197-200頁。
- 33) 『神学大全』42冊、200-202頁。

(キーワード: *χαρακτήρ*、character、品性、秘跡、靈印)